



発行所
 青山同窓会
 新潟市関屋下川原町二
 新潟高校内
 印刷所 オリオン印刷機
 0252-83-2151

年頭のごあいさつ

青山同窓会会長 鍵 富 清一郎



同窓会の皆さん、明けましておめでとうございます。

今年も、昨年の暮れからの数十年振りの大雪山の中であけましたが、雪に負けないで元気に、楽しく、良い年にする様に、皆さんでがんばりましょう。

私も昨年の秋には、東京青山同窓会の総会に招かれて行ってきましたが、若いも若き

もたくさん集まって楽しくやっておりました。各地で益々青陵健児ががんばっているのを本当にうれしく思いました。

日頃の幹事さん達のご苦労に感謝しています。会員の皆さんで盛り立てて、益々盛大な同窓会にして、又今年も楽しくやりましょう。



59年度総会盛大に 幹事長 50回 上村 光 司

昭和五十九年度青山同窓会総会は、七月二十日(金)午後六時から新潟市オークラホテルで開いた。集まる同窓生七百人、東京青山同窓会から百余人、田中幹事長、はじめ役員四人が駆けつけた。鍵富会長が元気にあいさつ、鈴木校長の学校現況報告などがあったのち、会務報告、五十八年度決算、五十九年度予算案(別項)を原案どおり可決・承認した。このなかで、会費納入額が年々増加してい



昭和59年度青山同窓会

ることに、各期幹事、会員のご努力、ご協力に上村幹事長から謝意表明があった。六時半から懇親会に移り、東京同窓会代表のあいさつ、第二十八回生松田安懷氏、松浦茂路氏両大先輩の音頭で乾杯、三階全フロアを埋めつくした会場は、会員の話し声で間もなくウナリを上げはじめた。宴たけなわのころ出席良好期に対して「越の寒梅」二本ずつの贈呈があり、受領証がわりにそれぞれの期が応援



歌を高唱、「青山」「青山」の雄叫びが波打った。懇談約二時間、鈴木副会長の万歳三唱で中締め、和氣あいいいの中で一同夏の夜の街に散った。

「寒梅」獲得の期次のとおり、64期43人、60期37人、53期34人、59期33人、49期65期、78期各30人

実行委員会への ご教示を

中高先輩層から、お叱りをうけたというので、そのへんに注意をすることであった。ただし、出来る限り多くの人が参加しやすいようにというのとて、会費五千円を大前提にしたのだから、料理の素材には自ら限界があったし、若い層と、中高年層との両方を満足させようというのは、毎年の難問であった。

座食に関しては、中締めの時間が立食のとこと比べて遅くなっており、懇親を深めるという観点では良くなったのだらうと判断している。

第二は婦人同窓生の出席をどうしたら増やせるかということであった。今年は前年よりほんの少しは増えたようだが、卒直にいつ、ここがわが同窓会の今後の問題点である。

東京青山同窓会 総会について

東京幹事長 田中 一郎

五十九年度総会の運営は前年について60回小林亨委員長をはじめとする実行委員会にて計画を詰めていった。要点は前年度総会に対する反省から始まり、どのように改善できるかであった。

昭和59年度の東京青山同窓会総会は、11月13日午後6時から、大手町のサンケイホールで開催されました。今回特筆すべき事は、新潟から例年どおりの上杉雅之(60回) 柝倉浩(69回)の両先生、事務局岩田はす枝さんなど3名の方のほか、同窓会長鍵富清一郎(19回) 大先輩と鈴木昭二校長のお二人の方が見えなくなったことでした。これは東京青山同窓会始って以来の事で、出席者一同大変感激し感謝した次第です。

断行した座食を続けることとした。懇親会となると、下世話なことながら食べるものが焦点となる。前年は油が強く腹にたまるものが多かったと

先ず総会は、南学正時会長(40回)の挨拶、田中一郎幹事長(43回) 相田正夫会計幹事

からご挨拶をいただきました。次いで講演会に移り「大学野球放談」と題して、東大野球部の投手として活躍した、大越健介(88回)さんの話は、特に若い会員の心に感銘を与えたようでした。

懇親会には出席の最長老佐藤岩男(33回)さんの乾杯の音頭により幕を開きました。今回は去る5月に新人歓迎会を行ったため、新人(92回) 諸君の出席が多く、活気に溢れた雰囲気となりました。アトラクションとして若手の幹事諸君の企画した「ウルトラジャンケン」は当日の圧巻でした。出席者全員が老若入り乱れてジャンケンをし、勝ち進んだ数名が壇場の上り最終決戦を行いました。優勝者には賞品として新潟銘酒「越の寒梅」の一升瓶が、その他に同

2面につづく

(一面よりつづく)
窓会特製手ぬぐい、一〇〇本が贈られました。
その他、運動部別に先輩後輩相携えて登壇したり、新旧校歌や応援歌の合唱など同窓会始まって以来の賑やかなパーティーとなりました。特に遠来の鍵富会長が、91才の御高令にも拘わらず、かくしゃくとしてご挨拶されたり、新人諸君と交歓されたりと大活躍をされたのは有難いことでした。出席者180名の盛会でした。

青山随想

★人を説得する効果的な話術に「・・・について三つのことを今日はお話ししたい」と切り出す方法があるという。一つ二つでは物足りない、かといって四、五では多すぎる。とすると三つあたりが人間心理を満足させるに程よい数なのであろうか。そういえば「三人寄れば文珠の知恵」と昔の人も強気に言っている。
★国民の信頼を得て再選され、政権を担って越年した大國の指導者三人にご登場願うことにする。レーガン、サッチャー、中曽根の三巨頭である。この三人の文珠の智慧なる共通項を一つあげるなら、「強

山添直氏(30回)の労作 明治伝える研堂日誌

(日本経済59・6・16)文化往来より

44回 水野清之助

先般日本経済新聞紙上にて先輩山添直氏の労作「研堂日誌」の記事を見ましたので同窓諸兄にもご覧いただきたく、左に本文を記します。

研堂、黒崎与八郎は庄内(山形県)の儒者。生を受けたのは嘉永五(一八五二年)

月から、病を得て没する直前の昭和三年1月まで、足かけ57年間にわたって、克明な日記を残した人としても知られる。明治の時の流れを、地方の文人の目ととらえたその日記は、貴重な資料とされながら、没後50年以上過ぎた今日まで、後世の人間に読まれる機会には乏しかった。
和紙二つ折りの用紙に、漢文で筆書された日記は、量が膨大であるばかりでなく、返り点や送りがないの全くない、いわゆる白文でつづらられている。月が必ずしも実力を発揮しきでないという教育制度の欠陥を指摘する首相の声も外電を通じ報じられた。文化も、芸術も大事だが、ソ連との宇宙戦争を優位に戦うため、理工系若き優れた戦士の養成に金を惜しんでほならないと叫ぶレーガン大統領。入試、偏差値、落ちこぼれをなんとかして欲しいとの強い世論に動かされ、各種教育機関行脚を自から実践された中曽根総理。年頭の記者会見で「入試と偏差値はなるべく早く改善する」とのこと。
★教育にとって何よりも大切なのは継続性であろう。親と子をして孫が三人寄つても共通の話題として学校の想いで、読解が難しかった。ところが今回、関係者の努力によって、貴重な日記の一部が現代語に訳されて出版された。「黒崎研堂 庄内日誌第一巻」である。
発行者は、研堂の遠縁にあたる人などで構成する同書刊行会。訳出したのは明治5年から同12年までの八年分にすぎないが、それでも上下二段組みで五百ページ余の大部の本になっている。
日記には友人、知人との行き来や、日々の雑感、あるいは

「三人寄れば」

校内幹事 60回 上杉 雅之

いの一語である。レディ・ファーストでゆこう。「鉄血宰相」と言われ「自由で強い英國の復活」を叫んでいる「サッチャー女帝」。強いアメリカになることが世界平和を保つ唯一の道と説くレーガン大統領

領。「不沈空母」のほとばしりをさました後は、日本はもう西欧から学ぶものはない」と言つたとか言わないとか。とにかく強い経済大國になることが日本の生きる道と、日本丸の舵を東にとる中曽根首相。弱い国にならう」と言

者が必ずしも実力を発揮しきでないという教育制度の欠陥を指摘する首相の声も外電を通じ報じられた。文化も、芸術も大事だが、ソ連との宇宙戦争を優位に戦うため、理工系若き優れた戦士の養成に金を惜しんでほならないと叫ぶレーガン大統領。入試、偏差値、落ちこぼれをなんとかして欲しいとの強い世論に動かされ、各種教育機関行脚を自から実践された中曽根総理。年頭の記者会見で「入試と偏差値はなるべく早く改善する」とのこと。
★教育にとって何よりも大切なのは継続性であろう。親と子をして孫が三人寄つても共通の話題として学校の想

は研堂自身も携わった開墾事業の進捗よく状況などが触れられている。教養人らしく、古人の教えに照らし合わせて、現下の社会を見る目などに興味深いものがある。
訳出の中心になったのは小田急不動産の社長などをつとめた山添直氏。専門家の指導を受けながら、八年間の月日をかけて訳出したという。だが、実業人の余技を超えた労作である。続刊が待たれる。

美術部OB会 ポインタ会の部

60回 金山 常吉

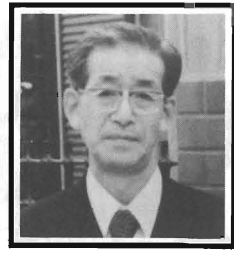
昨秋、虹色の映える横浜隣花死にて、在京60回卒業の美術部員が中心となって「ポ



ンタ会」が開かれた。三浦文治先生ご夫妻を中心に右端2回卒、久保(橋本)さん、益子(クリエイト)さん、曾我(アメリカンセンター)高山(ジャパッド)とそれぞれの奥さん。広告代理店 金山(アートランド)とそれぞれの奥さん。出席できませんでしたが、宮田(濃海)事業部長、小出(医師)中田(建設省) 新潟 湯小林(五泉屋) 中村(写真館)などが居ます。
2次会は港の見えるホテル ラウンジで、ブランド入り のコーヒーを味わいつつ十分な充電時間を持ちました。美術部に縁のある先輩、後輩のかたがた名簿を作ります。
〒162 新宿区中町15、金山 常吉 宛、3月末日までにご連絡下さい。(金山 記)

山崎寿吉君逝く

39回 福山 健



昭和59年9月10日、燕市教育長在職のまま、山崎君が逝去した。

勉強し次々と資格を取得して高校教師となって再起した。やがて頭角をあらわし、優秀校三条高校の、又は難題多き両津高校の校長等を歴任した。

その後迎えられて燕市の教育長となり、7年間在任していた異色ある存在であった。

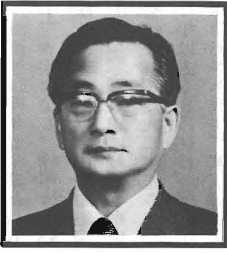
7月9日付の小生宛の手紙には「2週間毎に診察を受けていますが何んとか頑張りなす。そのうちに新潟に帰りませ……」とあった。

これが彼の絶筆となった。9月11日、市内青山セレモニーホールの葬儀は参会者約五百人、下越教育界での故人の業績をしのび盛儀であった。

併せて御遺族皆様の御健在を祈ります。戒名 眞教院釋徳寿 合掌

阿部芳男先生の思い出

69回 析倉 浩



本校の40回卒業生であり、長らく新潟高校で教鞭をとられた阿部芳男先生が、昨年の

思い出

8月6日に、悲しくも他界された。

先生は、昭和22年から19年間の長きにわたり、青山健児を指導され、その後新潟高校通信制主事、村上女子高校校長、教育庁社会教育課長、新津高校長の重要ポストを各々歴任され昭和51年3月御退職になりました。それからは、

勉強し次々と資格を取得して高校教師となって再起した。やがて頭角をあらわし、優秀校三条高校の、又は難題多き両津高校の校長等を歴任した。

その後迎えられて燕市の教育長となり、7年間在任していた異色ある存在であった。7月9日付の小生宛の手紙には「2週間毎に診察を受けていますが何んとか頑張りなす。そのうちに新潟に帰りませ……」とあった。

青山39回からは皆川竹次郎 小林清市郎、小林正人、今井 正雄、福山が出席して同君の冥福を祈った。

山崎君、君はほんとうに一生涯よく頑張ってくれた、また我々の会合にも多忙な日常をやりくりしてよく出席してく

今年3月25日の我々の古希祝の会に君は職務上の他の先約会合のため欠席したが、如何にも残念そうな欠席通知を僕に送って来た。今にして想えば万感胸に溢れるものがある。安らかに眠ってくれ。

併せて御遺族皆様の御健在を祈ります。戒名 眞教院釋徳寿 合掌

高校の初代校長に任ぜられた頃、私は県立小千谷西高校で勤務しておりましたが、先生が小千谷西高校を訪ねてこられた時がありました。それは小千谷西高校の校舎を視察し、村上女子高を新築する際に参考にされるとのことでした。

小千谷西高校は、初代校長菅原久夫先生(元新潟高校長)が辣腕を振るって諸設備を整えられた新設校でありました。

そこでの先生との再会ですが、七七年ぶりだったのですが、教室では見られなかった新たな重責に立ち向う姿が今でも

目に浮かびます。その後退職されてからも、青山同窓会などで、気楽に声をかけて下さりいろいろ御指導を頂いたりしました。

新潟県の教育のために粉骨碎身やつてこられた先生の御冥福をお祈りし、追悼の文といたします。

「特製手拭い」

東京青山同窓会 製作

60回生在校の頃の漢文の先生渡辺秀英さん(書家として)

新潟県の教育のために粉骨碎身やつてこられた先生の御冥福をお祈りし、追悼の文といたします。

高名)の筆になる新旧校歌に新旧校章を配したもので、新潟にも送ってありますので、ご希望の方は母校事務室同窓会へお申し込み下さい。価格は一本 三百五十円



昭和59年度青山同窓会収支決算書 (自 昭和59年4月1日 至 昭和59年3月31日)

科目	決算額	備考
繰越金	200,000	前年度繰越金
入会金	1,080,000	1. 年 生 1人 800円 × 450人 = 360,000円 2. 2. 年 生 1人 600円 × 900人 = 540,000円 自 制 1口につき 2,000円 × 30人 = 60,000円
会費	3,000,000	同窓会年会費 1口11,000円
雑収入	10,000	預金利子
合計	4,290,000	

科目	決算額	備考
人件費	2,270,000	職員1人給料手当、社会保険料
通信費	600,000	会報発送、総会、新年会、役員会案内郵便料、振替料負担金
印刷費	100,000	封筒、振替用紙、予算、決算、案内状印刷代
慶弔費	50,000	会員慶弔電報料、香華料、離任職員饗別
退職積立金	50,000	
諸費	10,000	消耗品費等
会報印刷費	370,000	年2回発行会報印刷代
会議費	300,000	総会、新年会、役員会、会議費、東京総会、支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品	160,000	卒業生における湯のみ代
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	200,000	通信制同窓生会費納入1口につき500円400口分通信同窓会へ補助金として繰出
予備費	100,000	
合計	4,290,000	

昭和58年度青山同窓会収支決算書 (自 昭和58年4月1日 至 昭和58年3月31日)

科目	決算額	備考
繰越金	326,965	前年度繰越金
入会金	1,115,600	1. 年 生 800円 × 449人 = 359,200円 2. 年 生 300円 × 448人 = 134,400円 3. 年 生 200円 × 448人 = 89,600円 自 制 1口につき 2,000円 × 110人 = 220,000円
会費	3,432,000	同窓会年会費 1口11,000円
雑収入	16,588	預金利子
合計	4,891,153	

科目	決算額	備考
人件費	2,274,862	職員1人給料手当、社会保険料
通信費	551,445	会報発送、総会、役員会、新年会案内郵便料、振替料負担金
印刷費	93,900	封筒、振替用紙、予算、決算、案内状印刷代
慶弔費	30,490	会員慶弔電報料、香華料、離任職員饗別
退職積立金	50,000	
諸費	3,980	消耗品費等
会報印刷費	342,000	年2回発行会報印刷代
会議費	283,076	総会、新年会、役員会、会議費、東京総会、支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品	160,875	卒業生における湯のみ代
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	272,000	通信制同窓生会費納入1口につき500円544口分通信同窓会へ補助金として繰出
予備費	140,000	東京同窓会補助金、野球応援バス代
合計	4,282,628	

収支差引残高 608,525円 残高処分案 基金積立 400,000円 次年度繰越 208,525円

昭和59年4月24日 上記の通り相違無いことを確認致します。 監事 福山 健 @ 監事 澤山 巖 @

38回 昭和6年卒同期会

38回 関 秀 雄



38回生は今年で卒業から五十三ヶ年になる。昨年は古稀祝で、千葉県富津市青堀鉦泉ホテル、喜楽館において東京勢が主催で盛大に実施された。今年は去る8月16日、信濃川畔の田中ホテルで東京勢の同意を得て実施、当日定刻の午後4時には、各地から参集し、顔ぶれは県外5名県内と市内を含め20名。今年は近年になり暑さにめげず、今日の集りを楽しみにしての出席。青陵

健康ここにありの張り切り振り。宮路幹事の開会の挨拶、物故者に対して心からの冥福を祈った。次に田巻壽雲氏より書作展に際しての会員の声援に感謝の礼が述べられ、渡辺常任幹事の会務報告と議事進行。続いて次期幹事2名選出並びに「古稀随想集」発行の編集委員として、新潟側8名東京側2名が決定された。来春までには発行される予定で今から期待されるものである。午後5時より懇親会に移る。ビヤガーデンを会場として信濃川の夜景を眼下に満喫しつつ、昔を懐しむものあり、民謡を歌うものあり、飲み放題、食べ放題で、腰を抜かす程の盛会裏に終了した。

例年ならば青山の応援歌と校歌で幕を閉じるのであるが、時間の制約と場所から他の客もおるので今回は遠慮したものである。その後、夏の夜まつり民謡大会、参加希望者14名は陸上競技場に赴き、佐渡おけさ、新潟甚句等ふるさとの民謡の踊りを、まああたり十分楽しみ散会した。

青山三八会は昭和23年以降

（青山三八会と命名以前には有志の会合が度々もたれた）よりずつと毎年一回か二回集り旧交を温めて今回で80回を数えるに到った。これ程盛大な同期会も他に例がないと自負している。 関 秀雄記

42回 定例の同期会

42回 中野 一 松



とにかく会えば楽しい。そこに青春があるからと、十一月第二土曜日を定例に、同期東北電力保安協会理事長の顔は、昔のまま細面、そして長い。卒業以来の御対面である。この会の常連、横浜の鳥羽正隆君が、関東在住諸君の代弁と、明年の卒業満五十年記念の会は、新潟との中間地「越後湯沢」で盛大にやろう。翌日はゴルフコンペもなどと発議。全員賛成和気藹々、飲む程に酔う程に、青春を讃え人生航路を語り交わす。さて、昨年は偶々同期諸君の不幸が重なった。本宮洵・前田政二・大橋貞夫の諸君に次いで、秋には東京で、飯島一良君（陸軍航空士官学校から日航入社、第一航空常務）新潟では、この会の常連で在校当時籠球部キャップのスポーツマンを自負していた阿部（中川）貞一君の早逝。この現実を参会の諸君共々かみしめ互いの健康を祝し、再会を期した。

篠田君の旅館に集まる。毎年誰かしら新顔が一人二人現われるのも心待ちだ。今年、仙台から三國文治郎君が来た。

66回 同期会

晩秋の色濃い昨年11月17日(夜)、タウンホテルの十階スカイレストラン「オーロラ」を借り切って、四年ぶりの同期会が開かれました。それぞれの社会の中堅や幹部として、忙しい最中でしたが、恩師渡辺秀英・松浪清・齊川正敏・岩野祐吉・澤山巖菅原欽一・横山貞雄の七先生をお招きして、市内及び近郊の人を中心に、遠く仙台、横浜、茅ヶ崎、入間、東京等からも参加して下さり、計81名とふくれあがり、会場満杯の大盛会となりました。



念同期会を、皆なで盛大にやろうと、力強く決意して。

「オリーブの木」

鳥ノ岡山のコースで修学旅行がありました。5月22日島の遊覧バスで小豆島一周見学に出かけましたが、その際新潟県の高校で小豆島（修学旅行に來られたのは始めてと、小豆島自動車KKが感激して、おみやげにくださった30cm位の苗が、気候・風土の違いを越えて母校に根付き、大きく育っているのです。十年後位に数回実をつけましたが、最近はその風に枝がさやさやゆれているだけのようです。近いうちに66回生のカンパで記念碑を建てようとの声も出ています。

当初の目標百名参加には及びませんが、手間も金も惜しませんが、全力投入して下さった幹事の皆さんに、一言お礼申し上げます。(F組矢田)



とこで母校正面玄関の向うに右脇に、かなり大きく育ち二階の窓まで枝が伸びている、常緑のオリーブの木を御存知でしょうか。そうそう玄関右の棕櫚の木の隣にあります。いつも66回生が集まると話題になる木ですから、簡単に紹介しておきましょう。昭和32年の初夏、5月18日↓24日の日程で、京都↓奈良↓西の京↓大阪↓四国↓小豆

62回 卒業三十周年 記念会 62回 青木留蔵

第62回(高6回)生の同期会が、去る8月4日午後6時から新潟市西大畑町「行形亭」で開かれた。銘打って「新潟高校62期生卒業三十周年記念同期会」。

当日は老いてますますご壮健の恩師先生18人、同期生105人(うち紅11点 合わせて123人の多数が参加、盛況であった。

62回生は、昭和29年卒業の340人(うち物故者6人)であるが、A組からG組の7クラスのうち、これまで新潟在住の有志、東京在住の有志らが中心となって、それぞれの同級会、地区同期会が開かれて来た。

そうした中から「昭和59年は卒業して30年の節目らね。ひとつ記念の同期会を大々的(?)にやろうてばね」という声が高まり、各クラスごとに世話人を選出、世話人会(代表井上泰二郎君、宮本輝夫君、事務局田村誠君)を発足させたのが58年の秋。母校九十周年を記念して完成された最新の同窓会名簿を手がかりに、住所の確認、予備調査、案内



状発送などに約一年近くの準備をし、日時、場所、会費、運営など会員の方々からも貴重な意見、要望を聞き、大方の賛同を得て開会にこぎつけた。

この夏は記録的な猛暑となり、当日も汗をふきふきの一日であったが、東京はじめ県



外からも多数の会員が遠路暑さにめげず続々と参加し、会を盛り上げた。定刻 星野陸夫君の司会で始まり、まず物故会員に黙とうをささげたあと、宮本世話人代表から趣旨説明があり、お招きした恩師の先生方から武田慎三郎、藤田久喜、倉科

彰夫の三先生に祝辞をいただいた。記念撮影は二回に分けて行い、井上一和先生の発声で乾杯、にぎやかに宴に移った。

全員起立の校歌斉唱。「百里流れて……(高校)は岩野祐吉先生のタクトで、玲瓏の天……(中学校)は渡辺秀英先生のタクトで参加者一同襟を正して歌った。また思い出の応援歌「丈夫の……」は三浦愛三君(東京在住、当時生徒会長)のリードで蛮声を張り上げ若き情熱をたぎらせた。飲むほどに酔うほどに、一人一人が三十年のタイムトンネルを抜けて紅顔可憐の若者となり、お互いにアダ名を呼び合い、「お前」「俺の仲に戻った。テーブルのあちこちには先生をかこみ、あるいはクラスごとの、あるいは運動部グループの輪が幾つも出来て、なつかしい興奮が渦巻き、真夏の一夜時を忘れた。

午後9時、再会を約しての万歳三唱が行形亭大座敷の天井を突き破らんばかりに響いたあと、余韻さめやらず、二つの若い河の流れとなつて二次会場へと続いた。また翌5日には、有志参加でフォレストゴルフクラブのコンペも行われ、懇親を深めた。

出席された恩師 敬称略 阿部正、井上一和、岩野祐吉、大橋植吉、小黒英作、倉科彰夫、齊川正敏、志賀哲夫

在校生の声 ジュニアオリンピック大会に出場して今思うこと

二の四小 林 義治

10月28日、僕は東京の代々木にある国立競技場で開かれたジュニアオリンピック大会に三段跳で出場しました。その日は秋晴れの良い天気、風も弱く絶好のコンディションでした。それまでの最高記録が13m90cmだったので、目標は「とにかく14m以上跳ぶこと」でした。

ウオーミングアップ、招集なども終わりのよい予選1回目の跳躍……「フール」しかし、調子は悪くなかったので特に動揺などしませんでした。そして2回目……「14m18cm」この記録が電光掲示板に出たときは、もう感動で胸がいっぱいでした。ちょうど、新潟高校に合格した時や、北信越大会の走幅跳で7m03cm跳び、秋田イン

関口昌孝、高橋是成、武田慎三郎、田辺啓三、藤田久喜、松沢昭然、松田一郎、望月彰、横山貞雄、渡辺秀英

ターハイ出場を決めた時のようでした。当初の目標であった14m以上を跳び、気分をよくしての3回目は、「14m44cm」この記録で予選を通過し、決勝の12人の中に入ってしまった。

決勝では、「できるかぎりのことをやる」と決め、「ベスト8に残る」とか、「6位内入賞などは、頭にはありませんでした。しかし、波に乗ってしまうと凄いのので、決勝の3回目の14m38cmでベスト8入り、さらに4回目には、14m69cmと自分としては考えもつかなかった記録が出てしまい、3位入賞となりました。

この時は、「うれしさ」よりもむしろ「驚き」の方が大きくて、表彰式の時には笑い顔など出ずに、放心状態のようでした。さて、これからの目標としては、やはり、石川インターハイですが、今、新潟の陸上競技場は8月まで改修工事の予定で、シーズンに入っても思うように練習できないかも

在校生クラブ等成績

ラグビー NHK杯県3位、全国大会県予選会3位、バドミントン 新潟地区女子3位、卓球 秋季新潟地区男女団体3位、漕艇 秋季県漕艇大会男子ナックルフォア1位、女子ナックルフォア3位、フェンシング 秋季県大会男女団体優勝(男女共名古屋で開かれる全国選抜大会出場) 男子フルール1位、208大島2位、209中山、男子エペ3位、209中山、女子フルール1位、201松井、柔道 秋季大会中量級3位、208西山、BSN大会軽量級3位、208細貝、剣道 秋季地区大会男女団体3位、BSN大会男子団体3位、陸上 日本選手権女子走高跳9位横沢美貴、全国ジュニアオリンピック大会3位、204小林義治(県ランキング1位)、全国ランキング入り) 秋季下越地区 男子団体2位、北陸地域選手権 走高跳1位、08横沢美貴、走巾跳3位、204小林義治、400mリレー3位、女子バスケ、BSN大会3位

しれません、なんとかこの苦境を切り抜け、満足のいく結果を出して将来のほずみにしたいと思います。

画人笠原軛と

その父漁村(六)

60回 小林 智明

漁村先生の「佐渡日詩」以後の遊方雑誌への投稿や、エピソードについては、もう少し記さなければならぬが、それは順を追って述べることとし、この辺で漁村の二男、屠龍こと、軛の中学生時代と彼の生涯に少なからぬ影響を与えた級友、先輩、後輩たちの交友について考察してみたい。話が前後する場面もあるが、これは漁村、屠龍父子の人物像に光を射せようとするこの連載の行方にも重要な意義があるので、なるべくくわしく記したいと思う。

笠原軛が新潟高等学校より、四年上級の兄の轍の後を追って新潟中学校に入学したのは明治三十一年四月、十三才の春である。当時の住所は、白山浦一丁目百二十二番戸であった。小学校へ入った頃は、下旭町五十八番戸の旧県庁の近くに家があった。その頃の軛の思い出に、次のような文がある。

小学生時代の私は旧県庁の近くに住み、亡父(漁村)は一時その小役人をしていたので、宿直の日には夜食の弁当を届けにゆき、時々あの玄関を仰ぎ見ると、破風を飾った金色の菊花紋章が燦然と夕日に輝いて居たことを今も想い出す。

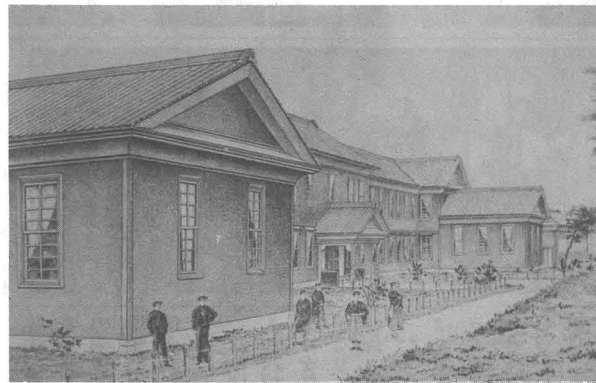
中通飯田旅館の玄関前に、あの頃の古い榎樹が一本今も蒼々と茂っている。そこには旧県庁の通門があった。私達はあの木の青い小さい実を採り、細い竹筒につめて押し出し、ポンと音がするをうち合ひして遊んだ。

(昭和二十九年新潟日報「昔と今」より)

中学入学試験のエピソードとしては、同級生の小柳篤二氏より直接お聞きした話では、「私が一番で軛君が二番でした。私は附属小学校より入学しまし

たが、彼は新潟高等学校から佐藤庄一郎君、小山九一君らと入って来ました。佐藤君は剣道の選手で小山君と私は野球部でした。軛君と私の家は百五十米か二百米くらいしか離れていませんでしたので、中学へ入ってから仲好しになり、彼の家へ遊びに行つたこともありませう。……」と語られた。

中学一年同期の中より名だたる面々を列記すると前記の小柳篤二、佐藤庄一郎(東堀前八、新潟高等学校校よりの級友、中学五年の妙義登山に同行、東大文学部)、小山九一(古町五、高等学校よりの級



初代校舎(明治26~大正9)芝蘭第8号より

友、昭石社長。薄田長太郎(當所通二、高等小学校よりの級友、俳名白天郎。古川修策(加茂、南画家美術評論家、号北華。諸橋宏(寄居町、横浜正金銀行ホノルル支店長、俳名桃村。山岸宏次郎(西蒲和納村、後に草野宏次郎、慶応大学医学教授、中学五年の妙義登山に同行。越川禄治(上大川前通八、旅館業。朝妻信次(西蒲曾根村、質営業)らがいいた。一年上級には、軛の一生に深い関係を持った三浦卓爾(水原、法学士、裁判所判事。五十嵐昌平(津

島屋、沼垂小学校長。村山真雄(東頸松ノ山村、歌人)がいたが、この三人は途中留年をして軛と同時に卒業した仲好しである。三人の他にも伊藤半二(新潟通、陸軍大佐。相沢長三(東頸松ノ山村、朝鮮興業(株)黄州支配人。宮川惣介(三条、陸軍主計ベルマにて戦死)。高島範三郎(西蒲岩室村、後に小島範三郎、薬種商)らも一年留年して同期で卒業した。その他には白勢量作(本町八、新潟電力社長。桑野締三(大洲、上海東亜同文書院。山崎良平(西蒲小池村)。伊藤精司(中蒲川東村、陸軍少将)らの英才がいた。

三年生には式場益平(五泉、国文学者、大阪女子師範教授、歌人、号麻青。難波剛平(新発田、眼科医。佐藤与一(亀田町、代議士)らに、その年長岡中学から転校して来た伊藤誠哉(東中通一、農学博士、北大総長、イモチ病防除の恩人)もいた。

四年生には兄の轍(文学士、渋沢栄一家歴史編集所)の他に会津八一。山内保次(南浜通二)、陸軍少将。野上俊夫(白山浦一、京大教授)らがいいた。野上俊夫の父知哲は、相川出身で漁村と同郷であったことから、軛の保証人でもあった。またこの学年で兄と同級であった渡辺順(中野山、渡辺浩太郎元新潟市長の父)のように、この年の三月家の都合により三年で退学した者もいた。

最上級の五年生には、高田中学から戻って来た建川美次(西堀通五、陸軍中將)が颯爽として野球をやっていた。

これらの他にも勿論たくさんの英才がひしめいて明治二十五年七月の創立以来、ようやく六年の歳月を経た新潟中学校で、勉学と運動、それに発火演習と呼ばれた軍事教練にいそしんでいた。

昭和二十七年、新潟中学校創立六十周年を記念して発行された「青陵回顧録」は、その頃の学校の様子を諸先輩が記録した貴重な資料である。当時の現職員でおられた池政業先生の「青陵変遷史」という長文のご著作や、第一回生齋尾精治(西蒲黒鳥村)の「創立当初の思い出」。六回生伊藤太郎兵衛(北蒲黒川村)の「中学時代」。七回生山内保次の「新潟中学生時代を回顧して」。九回生青木得三(秋田より転

入)の「回顧談」の次に、十回生笠原軛の「五十年前」という文が見える。その前段の方をここに転載して当時の様子をうかがってみよう。

松林深き青山の
山のこなたは我校舍
続く苫屋の三つ五つ
之を関屋の眺めなる。

之は私達が在校時代、英語の教師が作った唱歌の一節である。当時また校歌などは無く、誰も之を歌うものもなかったが、今之を口吟むと、塵都を遠く離れて青松白砂に抱かれたその頃の校舍附近の光景が、そぞろに思い出される。……

然し私達が入学したのは日清役より二年後の明治三十年(ママ) 国威の伸張は軍備の拡張とばかり、中学校は特に軍事教育に力を注ぎ、毎年の卒業式には、現職の海軍軍人が来て志望者を煽つた。軍旗を模した校旗が出来て、旗手と護衛が定められたのも五年生の時であった。晩秋の発火演習と初春の雪中行軍、そうした事も今となつては楽しかった思い出として、その頃をなつかしむのみである。

四年生の時に県で中等学校の最初の連合運動会が寄居浜で行われたが、其の日の競技種目で運動といつては徒歩と器械体操と野球だけで、実は午後からの兵式教練と発火演習が主なのであって、それには新発田から本職の軍人が来て、審判と指揮をした。その日の徒歩に二級上の荒川謙二(並木町)と白勢量作が千米ばかりの砂上のコースを走つて、二着を占め、器械では同級の桑原貞三(鳥屋野)、阿部行一(村上)が優勝し、佐渡中学の北玲吉が逆車輪を十二回やったのが今も眼前に浮んでくる。

そうした教育方針に煽られて、同級中軍人に志したものは海陸合せて十余名を算える。(以下略)

日露開戦が、数年後の明治37年にせまっていた時代である。
(次号につづく)

何か異質な世界の体験

67回 沢田 俊一

総務庁が主催する『東南アジア青年の船』(59年9月中旬〜11月中旬)に、日本青年35名のリーダーとして参加する機会を得ました。このことは、前号で紹介されました。ASEAN諸国(今回の寄港地の順に従えば、タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、ブルネイ)そして日本の7ヶ国から、それぞれ35名の青年が参加し、約1万トンの船に乗る組み、各国を訪ねる2ヶ月の間、親善と交友を深めるというのが目的です。第11回目の計画で、誰にも門戸は開放されていますが、但し、共通の言葉として、英語を自由に話すこと、そして、強い体力と精神力を必要とします。

この可能性を見出す努力をするとは、私にとっては、「生き様」の具現の一つです。だからこそ、教室とは全く異なる世界、山の中など、通常の環境とは異質な環境に、自分自身を、置くのです。今回の、私にとっては4回目の国外への旅を通じて、改めて感じたことが、幾つかありました。第一に、人間は、

イデオロギー、習慣、風俗、宗教、その他を超えて、或る範囲以内では、お互いに理解し得ることです。その基盤になるのは、多分、簡単な言葉ながら、「愛」ではないのかと思います。そして、第二に、人が社会に生きて行くとき、最後に役立つのは、学問上の知識もさることながら、出来ることならば、生きるとか死ぬとかの、非常に緊張した極面の経験ではないのかと思います。その点に関して、今回の旅でも、私自身の普段の生き方が、とても貴重な意

青山渋柿会例会

38回 近藤 円



復活第八回渋柿会(寄宿舎)は恒例により十月第一日曜七日午後一時から同窓田中松一氏の経営する田中ホテルで開催した。日柄が良さたのか常連の欠席多く、出席十名。相模原市から近藤百之氏、長野市から細野哲雄氏と遠路遙々の参加もあり、いつもながら寄宿舎時代の思い出やその後の人生を語り合つて三時半終宴、また来年の十月第一日曜六日の再会を約して別れた。出席者は前列左から(35)近藤百之、(36)吉川恒吉、(33)永井行蔵、(30)丸山英二、(38)細野哲雄、後列(35)武田慎三郎、(35)内田善衛、(37)河内正彦、(36)山田利平次、(38)近藤 円

これは、国境とか国籍とか、宗教とか風俗などを超えて、共通でした。普段とは違った領域で自己

味を持ちました。それにしても、長期に渡つて学校を留守にすることを許して下さった全職員と、その間を頑張った受持の生徒諸君に、感謝の気持ちで、一杯です。

ハイティーン水泳 新中・新高◎

連載 60回 平田 大六

11 正選手へ

一九四八年、私は新潟中学校3年生、その上の人は新潟高等学校1年生、という変則的な学内生活が始まった。水泳部内では、それがどうであれ、上下の関係にかわりはな

人が、何かの仕事をする時、結局は、その周辺の人の理解と協力が無ければ、自他共に満足いく仕事が出来ないことが多いと思います。学校下越地区体育大会というのが開かれた。私は高校生ではないけれども、旧制中学の3年生以上は出場できるということで、選手にさせられた。大会の前日、プールサイドで私は足に長い釘を踏んでしまった。この傷では出場できない。包帯を巻いてやってみたらだめなのだ。水に入ると間もなく解けてくるし、わずかな布片でも水の抵抗を受けて、スピードがおちることも試してみてもわかった。大会の朝、家で私は包帯を解き、傷の薬を全部取り除いてしまった。それを見て姉はバカなことをするぞと強くだした。私はいくらからか化膿しかけてきた傷の汚れをふきとってから、傷穴に工作に使っているセメダインを注ぎこんだ。溶剤の刺激からくる激痛で私は失神しそうになった。しばらくして痛感はずり、傷穴はセメダインでキツチリとふさがれた。もう水は入らない。いくら動かすと痛いが包帯よりははるかによい。種目はまず四百メートルだった。会場になった新潟高校のプールサイドにはぎっしりと観衆が入り、新しい水の張られたプールは、いつもと違う雰囲気であった。無名の新

12 私の初陣

6月に入ると、新潟県高等

魚(サユ)の組の中でも速い方になっていた。ある日、大黒監督の前に呼び出された。おまえを今日からロングにする、と云われたのだ。これはつまり、今日から長距離選手のレギュラーにする、という意味だ。長距離のレギュラーはその頃数人いた。私はうれしさよりも、そのレギュラーの上級生達を、どうやって追いついてゆこうか、という不安に強くなる。3年前はじめて入部した頃に「明日から、2年生と一諸に泳がすつてな」と、特訓を云いわれた時とは違った気持ちでうけとめていた。

人には誰れも目もくれないし上級生や先輩だって特別声をかけてくれるわけでもないのが、むしろ気楽にさせた。スタートして、25mの折返しは、やっぱり最下位だった。みんなは飛ばしている。先行泳者の「航跡」はだんだん遠ざかってゆき、100mまでになり離れてしまった。しかし、その後は、差はひろがらず、200を過ぎてから再びその「航跡」をとらえることができた。水がきれいなので、私が相手の足と並び、腰と並び、そして頭同志が並んでゆく過程がよくわかった。350mのラストゴングが鳴ったときは独泳の体制に入っていた。ゴールして、私は自力でスタート台にはい上ると、私をひきあげるために手をさし出しにきた上級生にバカどなられた。これまで練習のときには上級生をひき上げるのは私たちの役目であり、私たちはいつも自力であったのだ。たとえ下級生であっても、レースの優勝者を引き上げる役目は光栄である、ということとを私はまだ知らなかった。これが私の初陣であった。(次号につづく)

人物紹介——49期生(その二)

多才・多彩各方面で活躍

49回 駒林 行 弘

年末、28日、外山、岩瀬、小林が私の事務所にやって来た。大掃除をするためだ。

一年間、49期会の事務所として使わせてもらったお礼だという。何と心の温かい連中だろうか。

こんなことから、わが同期を紹介しようと思った。

青山で学んだ同窓の方は、わが同期の者に「私も青山です」と気軽に声をかければ喜んでくれるし、きつと何かよいことがあると思う。

その外山芳夫、農林省を退職して、いまコンピュータに熱中している。数学のできる男だ。岩瀬喜喜松、中学時代は秀才だったが今は魚釣りを楽しんでいる。めつぼう機械に明るい。小林幹雄、桃山小の校長を早々と退職し、競馬研究に余念がないが、暇をみて絵も画いている。

実業界に目を転じよう。相沢喜吉、次々と石油スタンドを増やして販路を拡げ、かくれた財閥と評価をえている。砂糖問屋の高橋政弥もその道では一頭地を抜いている。まちのど真中、北光社の齋藤敬治は腰の低さに定評があ

るが、どうして芯は強い。建設業界では西松建設の副社長本間俊之が業界のリーダ一役。異色といわれる神林光

旧制新潟中学の頃

39回 渡 辺 俊 男

旧制新潟中学は「新中」と通称され、街の人々に親しまれていた。しかし中に住むわれわれは、もっぱら青山動物というニックネームを用いた。ほとんどの先生は、その特徴ある言動態度と顔つきのために、動物の名で愛称される。本名を忘れても、それだけは青春の日とともに忘れ難い。

多々ある教諭陣は、何れも何れも「坊ちゃん」に優るものばかり、一番うるさかったのはシヤモである。古くなつて色ざめた陸軍大尉の軍服を着て、生徒を叱りとばしているのが彼の信条で、いつも満足している。彼に叱られない生徒は一人もいない。叱られるのが当り前だと思つていて、誰も気にしない。叱つても生徒を憎むことはしなかつた。後日総合で誰かが言つ

た「シヤモの正義感には一度の浮気もなかった」と。卒業後20年30年経つても、いつも話に出るのはこの陸軍大尉シヤモ先生の話である。寄宿生にとって怖いのは、渋谷先生ことカバであった。生徒の気持など少しも察してくれない。悪い方へ、悪い方へと先廻りしての説教である。説教を承つている生徒はいつのまにか「俺とはこんなに悪奴なのか」と思い込む様になる。まるで警察官が教科書を読んでる様な授業だった。舎監の住宅は寄宿舎の端にあつた。可愛そうなのはカバの娘さんである。たまり兼ねた母親が「お父さんはとにかく娘まで、カバ、カバといわないで下さい」とどなり返してきた。充な話であり、筋の通つた話であるが、それが15

雄は巽建設の総師、鈴木研造も地元で頑張っている。毛並みの良いのも多い。石油で有名な金津の中野家の当主として忙しい中野重孝、八木朋直の孫、八木敦は大信工業社長をしている。在野では長谷辰こと長谷川

辰蔵は新和清掃社長に、本間日出男は県警柔道師範を長く務め、大御所として後輩の指導にあつてゐる。地主では横越の原猛、新津駅前更美好館を経営している。海陸運送取締役羽田俊夫も地主の出と。 (長文のため以下次号)

16才の少年にはわからない。ふつらとした下ぶくれの顔で、目が細く見え、可愛い顔をしてゐた。カバ代りに娘さんをいじめつけた。今考えてみると申し訳のない事をしたと、つくづく思つてゐる。60人近い先生は、苗字を呼ぶより渾名の方がはるかに適切である。後頭の禿げた逆ポタルは数学の芝間先生。髪が濃くて、胴体が大きく、脚が未細がりの「オットセイ」は物理の先生、化学の黒田先生は股を開いて歩くので「せんきん」、植物の名義はするが、口吻が突出して赤ら顔の「ゴリラ」と愛称される金沢先生。頭髪が硬直なのがたつてゐる「山あらし」長野先生。人間とはかくも個性があるものかと感心した。背が高い体操の中川先生は「巨漢」同じ体操の先生でも頭が丸くキューピイの様な頭の「くずまん」先生もいた。しかしこの先生方も皆故人となつた。

在校生の声

陸上を続けて

1の8

横 沢 美 貴

私は今年比去年に比べて、記録は全く伸ばすことができませんでしたが、いろいろと大きな大会に出してもらえて運が良かった、やっぱり高校でも陸上を続けて良かったと思つてゐます。でも、私は前からそう思つてゐた訳ではありませんでした。

私は小さい頃からピアノが好きで、ずっと続けていたのですが、高校でも続けるつもりで、ピアノと同じ位、好きになつてしまひ、どちらも、あきらめられなかつたので、高校ではとにかく必死に頑張つて、両立させようなどと甘い考えで陸上部に入部しました。でもしばらくすると、とても自分には無理だ、やはりどちらかにしなければならぬ、という風に考えるようになりまして、そして、どっちをとつた方がいいのか、本当に悩んだのです。そしてその結果、陸上を選びました。ピアノをやめてから、本当に両立できなかったのか、陸上は、ピアノをやめてまでする値打ちがあるのか、とか、またいろいろ考えました。そんなことをしな

がら、毎日部活に明け暮れていたのですが、その頃から陸上に集中するようになったせい、陸上の良さ、例えば、練習の後の汗、大会で知り合った友達、先輩との交流とか他の部でも、もちろん経験できる事だとは思いますが、こんなことが、前にも増して、強く感じられるようになりました。そして十月に、日本選手権に出場させてもらひ、国内の、有名な選手と一緒に競技できた時、自分はやっぱり陸上をやつて良かったと、やっと素直に感じる事ができたのです。その後は、練習にわかまりを感じなくなり、前よりも打ち込めるようになりました。そして考えもしなかつた、日本陸連の強化合宿のメンバーに選ばれてしまつたのです。今、自分は本当に恵まれてゐると思ひます。今でも、ああ、やっぱりピアノはいいな、と思うことはありますが、それも前ほどではなくなりました。でも、陸上上で、こんなにいい思いをしているのに、他にも何かやりたひなんて、きつと私は欲張りなんだと思ひます。

とにかく、気持ちの整理のついたところで、今後はできる限り努力して、頑張りたいと思つてゐます。今年

はいろいろと御協力ありがとうございました。うございませう。

編集部注

昨年(58年)のインターハイ走り高跳四位、沼垂高のオリンピック選手佐藤さんの後継者の一人と目されている有望な本校選手です。

* 59年

後輩の成績(体育)
卓球 シングルス本間詩雨?
回戦敗退 瀧 男子ナックルフォア一次予選通過、二次敗復止まり。陸上 男子走り高跳小林義治予選敗退、400mリレー一次予選敗退、女子走高跳横沢美貴4位 フェンシング 男子フルール一回戦杉山佳隆2敗片桐史裕2敗 男子エペ一回戦遠藤徳夫1勝2敗 男子団体一回戦新潟高2―5 諫早高 女子個人フルール一回戦原ひさ子2敗 軟式庭球 三浦・白須組一回戦敗退

後輩の活躍(文化)
美術 県高校美術展入選10の内山20の皆川2小野塚3菅森 書道 県高校美術展書道部門入選 織原貴英、長谷川静恵、県競書大会 準特選 高橋志麻子、金賞、後藤千賀子、蘇耀聰、福島健市、銀賞、織原貴英、青木瑞佳、高橋優子、銅賞、佐藤陽子

